

扉 INTERVIEW 開く

プロバスケットボール選手

田臥勇太

TABUSE Yuta

日本人として初めて、世界最高峰のプロバスケットボールリーグ「NBA」のコートに立った田臥勇太さん。この競技では小柄な体格にもかかわらず、華麗なプレーでファンを魅了し続けている。小学二年生でバスケットボールを始めて秋田県立能代工業高等学校で「九冠」を達成し、さらに米国留学からNBAデビューを果たすまで、田臥さんは数々の出会いを重ねながら道を拓いた。現在所属するプロバスケットボールチーム・宇都宮ブレックスへの思い、そして国内バスケットボールの未来について語っていた。だいた。



出会いを重ねて燃やし続ける バスケットボールへの情熱

能代工での高校三年間で バスケットがもっと好きになった

—— 田臥さんがバスケットボールを始めたのは小学二年生の頃でした。

田臥 母が元選手で姉もクラブに入っていましたし、近所のお兄さんたちもよくバスケットをやっていたので、僕も自然と始めた感じですね。ある日、父がNBA（全米バスケットボール協会）の試合を録画して見せてくれて、スーパースターのマジック・ジョンソンに憧れました。こんなプレーをする選手がいるんだと。僕は、はまったらとことんやる。バスケットでは誰にも負けたくないという気持ちが強かったし、マジックみたいなプレーをしたいと思って練習に打ち込みました。

—— 小、中学校と田臥さんのチームは全国大会に出場されていますが、バスケットの強い学校を選んで進学したのですか。

田臥 いえ、たまたまラッキーなことに、バスケットの強い小、中学校がある地域で僕は育ったんですね。顧問の先生も教えるのが凄く上手で、小学校で全国大会を経験した後、地元の横浜市立大道中学校に進学したのですが、これまたラッキーなことに、伊藤博之先生という神奈川県で名の知れたバスケットの指導者が大道中にいらしたんです。当時は指導から離れていましたが、バスケット部の顧問の先生がお休みされることに

なり、伊藤先生に「大会までいいので教えてください」とお願いしたところ承諾してくださって。三カ月ほど伊藤先生にたたき込まれて、全中（全国中学校バスケットボール大会）で三位になることができました。

—— 高校はバスケットの名門、秋田県立能代工業高等学校（現・能代科学校技術高等学校）に進みました。

田臥 有難いことにいくつもオファーをいただきましたが、実は能代工からは来てなくて、自分も行けるとは思っていませんでした。だけど、これもラッキーなことに、伊藤先生が昔から能代工の大ファンで、伝手をたどってくれたんです。そして、「能代工の練習会に参加してみないか」って。全中で三位になれたので声がかかったのかなと思います。が、たぶん、伊藤先生じゃなかったらそうなっていなかったです。

練習会に行ったら雑誌やテレビで見た能代工の先輩方がいて、後に同級生となるメンバーもいて、こんなうまい人たちがいるんだと嬉しくなっていました。練習会が終わった瞬間に「僕、能代工に行きます」と言っていましたね。

—— 能代工では一年生から先発入りし、インターハイ、国体、ウィンターカップを独占する三冠を三年連続で達成しました。「九冠」達成の前に、プレッシャーはなかったですか。

田臥 三年生になって僕らの代でも勝ち続けたいという気持ちはもちろん強かったですが、九冠のかかった大会でも、実は決勝より一回戦の方が緊張しました。大会の入り方は大事で、ここで乗れたらスムーズにいきますから。

能代工では練習のときから一つのプレーやミスの重みをたたき込まれ

ていて、試合の方が楽と思えるくらいでした。だからみんながそれまでやってきたことに自信を持っていたし、最後はそれを全部出し切るだけ。決勝は全然緊張しなかったですね。

——能代工での高校三年間で、一番身に付いたことは何ですか。

田臥 バスケが小さい頃から大好きでしたが、能代工でより好きになりました。バスケットを将来ずっとやっていきたいな、仕事にしたいなと心に決め

遠い憧れを超えて

NBA挑戦を決断した日

——能代工を卒業した春、世界選抜チームの一員として米国でのフープサミット（全米ジュニア選抜と世界ジュニア選抜の対抗戦）に出場しましたが、手応えを感じられましたか。

田臥 やれるんじゃないかなという気持ちと、これはとんでもない世界だという気持ちと、両方でした。とんでもないと感じたのは、まずサイズの大きさと、それからメンバーたちの根拠のない自信みたいなものがすさまじかったです。ただ、後にNBAのスターになる選手たちと戦

た時期だったと思います。高校三年間、結果的には全国大会を全部勝てましたが、練習が大変なときもみんなで励まし支え合ったり、ときには下宿でバカもやったりして、チームスポーツの有難さを凄く感じました。能代の街も凄いですよ。バスケットの街なので地域の方が本当に応援してくださる。普通に歩いていても声をかけてくれるし、成績を出せばちゃんと反応してくれる。それも貴重な経験だったなと思います。

えたのは刺激になりました。NBAにずっと憧れを持っていた中で、少しでもその距離が縮まったような現実感も出てきました。彼らに追いつくにはどうすればいいか。最短の道はやはり米国でプレーすることじゃないかと思うようになりました。

——その後、米ブリガムヤング大学ハワイ校に留学されました。NCAA（全米大学体育協会）のルールで一年目は試合出場なし、二年目も腰の手術などでプレーできませんでした。ようやく三年目に主力選手とし

て活躍されましたが、その後大学を中退して日本に戻られましたね。葛藤はありませんでしたか。

田臥 この選択はめちゃくちゃ迷いました。バスケ人生で一、二を争うぐらい迷ったんじゃないですかね。最初のシーズンで手応えはあったので、次はもっとやれるという自信はあったし、コーチ陣からもめちゃくちゃ引き止められました。だけど、世界選抜と一緒にやったメンバーがNBAに次々にドラフトされ、彼らとまた戦うためにはどうすべきかと考え抜いた末、一度日本に戻ってプロとしての基盤をつくった上でNBAにチャレンジする。それにはなるべく早い方がいい。その時点で僕は二〇歳を過ぎていて、すでに後れを取っていましたから。

——帰国後、日本のリーグで大活躍し、新人王になりました。それでNBAから声がかかったりしたんですか。

田臥 いやいや、とんでもないです。当時の日本のバスケなんて、リーグがあることすら（米国で）知られていなかったです。

日本で一年プロとしてやってみて、自分がどうしたいのか、やはりNBAに行きたい。そのためにはどうすれ

ばいいのか考えました。これもラッキーなことに、ブリガムヤング大の元コーチがNBAのデンバー・ナゲッツのコーチングスタッフに入っていたんです。見に行きたいと連絡したら「来ていいよ」と。日本のリーグが終わった直後に、一人ですぐ行きました。

ナゲッツの練習も試合も、ロッカールームまで見せてもらい、NBAの雰囲気や凄く味わって、そこには刺激がなくて。そうしたら、能代工の練習会のとくと同じように「ここに行きたい」と、純粹にただその気持ちになり……。気付いたら、横浜の実家に国際電話して、父に「俺は米国でNBAに挑戦するから」と告げていました。

——二〇〇三年七月、ダラス・マーベリックスの選手登録枠を争うサマーリーグに参加します。

田臥 ダラスのGMが高校時代の僕を見て、覚えてくれていて呼んでくれたんです。周りはドラフト指名された若手選手ばかりでレベルは凄く高い。でも、NBAの練習着を着てNBAの練習場で練習できている時点で嬉しかったですね。結果は何も考えず、ぶつかるだけでした。それに、日本のチームに一年での退団を



たぶせ・ゆうた●1980年生まれ。神奈川県横浜市出身。8歳でバスケットボールを始め、横浜市立大道中学校では全国中学校バスケットボール大会で3位の成績を収める。秋田県立能代工業高校に入学後、3年連続でインターハイ、国体、ウィンターカップの三大大会を制し、「9冠」を達成。米ブリガムヤング大学ハワイ校、トヨタ自動車アルバルク（現・アルバルク東京）を経て、2003年からNBA（全米プロバスケットボール協会）に挑戦。米独立リーグのロングビーチ・ジャムでプレーした後、2004年フェニックス・サンズと契約、開幕ロスターに入って日本人初のNBAプレーヤーとなる。同年11月3日のデビュー戦では7得点1アシストと活躍したが、4試合のみの出場でシーズン途中に解雇された。その後、再びジャムに移籍するなどしてNBA復帰を目指したが、2007年シーズン後に帰国を決断。2008年にJBL（日本バスケットボールリーグ）のリンク栃木ブレックスに入団。2016年にBリーグ（日本の新しいプロバスケットボールリーグ）が開幕した後も、「宇都宮ブレックス」と名を新たにしたチームでコートに立つ。2024～25シーズンで同チーム在籍は17季目となり、今季3度目のBリーグ優勝を果たした。

後、解雇されました。

田臥 解雇は突然来ました。前日もベンチに入っていたので、ここでも来たかと。その後、マイナーリーグで四年ほどやりました。環境はNBAと大違いで、練習場も一般の人が使った後だとか、移動もバスで七、八時間とか平気でありましたね。でも、NBAの凄さを経験して知っているので、またあの世界でやりたい、戻

日本のプロリーグで挑戦を続け バスケット文化を創造したい

りたいという気持ちが強かったですね。それが嫌でやめたいとかは全然なかったです。

——NBA復帰は今もあきらめていませんか。

田臥 あきらめていないというか、これは自分が決めることでもないし、もし（サマーリーグに）来ていいよと言われたら行きます。バスケット選手はだれでも一緒だと思います。

受け入れてもらったり、いろんな方々の協力がなければNBAに挑戦できなかった。だから、責任というか、自分で決めた道をとことんやらなきゃと思っています。

——NBA挑戦二年目の二〇〇四年十一月三日、厳しい競争を勝ち抜き、フェニックス・サンズの選手として、日本人で初めてNBAのコートに立ちました。日本のバスケットは大熱狂でしたが、ご本人はいかがでしたか。

田臥 全然冷静でした。むしろ、「こ

のチームに残らない」という気持ちの方が強かった。NBAは、与えられた時間の中でそれなりのプレーをしないと明日はない、という世界です。あのデビュー戦に出ることよりも、そこまでのプロセスの方が本当に大変だったし、ユニフォームをもらってコートに立てても、そこがゴールじゃない。今まで歩んできた以上のプロセスをまた踏んでいかなければいけない、という危機感が強かったですね。

——サンズでは四試合に出場した

——二〇〇八年に帰国し、現在所属する宇都宮ブレックス（当時のリンク栃木ブレックス）に入団され、今年で一七年になります。この間、ブレックスでプレーする上でのモチベーションは変わってきていますか。

田臥 いや、変わらないですね。毎シーズン新しい気持ちで優勝にチャレンジする。メンバーやスタッフやコーチ陣が毎年変わっていく中で、毎年新しいチャレンジを積み重ねてきたら一七年たっていたという感じ

です。共に戦わせてくれるブレックスには感謝の気持ちしかないです。だからこそ、魂をすべてこのチーム

に注いでバスケットをしたいという思いが年々強くなっています。優勝した年も悔しい思いをした年も、いろいろなストーリーがあるわけで、それを仲間たちと歩んでいけていることが幸せです。

——よりプレータイムを取れるチームに移りたいということはないですか。

田臥 それはもうないですね。自分に役割を与えてもらえて、それがチームやチームメイトのためになるのであれば、それをやりたいという思いが強いです。プレーしたいという選手ももちろんいるだろうし、いろいろな



考えがあると思うので、どれが正解というのではない。正解は自分次第だと思うので、自分で決めたら、僕はそれにとことん一〇〇%、一二〇%、毎日向き合うというタイプなんです。

——高校時代、能代はバスケットの街だと実感されていました。ブレッक्सの本拠地・宇都宮も同じような雰囲気になってきましたか。

田臥 僕はブレックス歴が一番長い選手なので、チームがファンの方と一緒に成長してきているのを実感しています。選手からスタッフまで一丸となって、宇都宮そして栃木のプロスポーツを盛り上げていこうという一体感がどんどん強くなっていて、それにファンや地域の方たちが反応してくれて、前に進んでいる。これからも歴史をつくっていくって、ブレックスが

——NBA選手としては、田臥さんの後に渡邊選手、八村選手が続く、昨年からは河村選手が活躍しています。

田臥 素晴らしいですね。河村選手はNBAとマイナーリーグを行き来して凄く大変だと思うけど、チャレンジしようという姿勢はたくさんの人に伝わっていると思いますし、子どもたちを含め多くの人に刺激を与えてくれていると感じています。

——もっとみんなNBAにチャレンジすればいいのと思われませんか。

田臥 こればかりは人に言われてやっているようでは、とてもじゃないけどやれないと思います。でも、チャレンジしたらいろいろな世界がみられるし、絶対プラスになることが多い。今、チャレンジしている選

Bリーグのトップになる。それはバスケットの順位だけではなく、ファンの熱さだったりチームとしての体制だったり、いろいろな意味でトップにいられるチームになってほしいなと願っています。

手たちの姿を見て、バスケ界に一人でも多くそういう選手が増えてくれればいいと思います。

——日本バスケ界がさらに発展するために必要なものは何でしょうか。

田臥 僕も常に考えているんですけど、結局全部なんですよ、海外に行く選手が増えるのも一つだし、国内リーグが充実して注目してもらえるとこの一つ。野球やサッカーは世界と戦えるレベルまできているから凄く盛り上がっているわけです。バスケットも昔に比べたら距離は縮まっているけれど、世界中の国に置いていかれないように進んでいかなければいけない。バスケットに関わる全ての人によりよくするために努力をする、チャレンジするということが大事になってくるんじゃないかなと思っています。

——日米のバスケットの距離を埋めるにはどうすればいいでしょうか。

田臥 もともと日米のバスケットは根本から違っている部分があるわけなんです。選手の生まれ育った環境も違うし、ハングリーさの持ち方だって全然違う。それは僕も向こうへ行っ

て凄く感じたし、いろいろな環境でやってきた選手がいて、いろいろな表現をする選手がいて、それは日本

と比べることじゃないなと思ったというか……。

——では違うベクトルで勝負するということですか。

田臥 むしろそっちの方だと思います。日本代表がワールドカップとかオリンピックで今回頑張ったように、日本は日本の持つ力で戦うことも方法の一つ。がちんこでやっても、あの身体能力との勝負では難しい部分もあるので。日本人の凄さはそういうところにあるのかなと思います。

——田臥さんのこれからの夢は？

田臥 バスケットをやっていられば幸せなので、一日でも選手を長く続けられればいいなと思っています。そして、バスケット選手が子どもたちの将来になりたい職業に出てくるとか、バスケットがいつも世の中の話題に上るようになって、日本の文化の一つになればいいなというのが僕の夢ですね。

——本日は、ありがとうございます。